

JOURNAL

男女平等推進センター
ジャーナル

2009

vol.33



Contents

- 事業紹介
チャレンジしよう自分のための仕事づくり!
こうやって治せる 女性の排尿トラブル
- 誌上講座レポート
記念講演「ひとりの覚悟」 沢木 耕太郎
- 特集…くるめフォーラム 2009
「響きあう 男女たちの生き方」
- 女性に対する暴力をなくすキャンペーン
- 相談室だより
性犯罪の裁判員裁判にみる問題点と
今後のあり方
- 登録団体紹介
登録団体ってなあに?
- 図書情報ステーションコーナー
ひとりの準備 みんな最後はおひとりさま

<http://www.city.kurume.fukuoka.jp>



スはいつでも自由
に団体の情報交換
などに使用できま
す。この団体用
のロッカーも資料
に利用できます。
男女平等推進セン
ターの登録団体だ
なって、活動の難
きをひけてみませ
んか?

登録団体ってなあに?
①団体登録制ではない
②目的は明確ではない
③男女平等推進センターの用
意の活動スペース
④このスペースは男女平等推進
センターの活動スペースとして
登録団体以外の団体や個人が
自由に使える活動交流スペース
登録の特典とは、
●登録団体の用米約10kg(団体のみ)を早くも、使用す
る日の3ヶ月前の10日前に利用申請に申込みできま
す。男女平等推進センター専用施設は、定員12名から最大
72名までの大、中、小の研修室があり、複写機材やスクリ
ーンを設置しています。テレビデオやマイクセットなども
無料で貸出しています。
●窓口以外に電話予約センターからの申込みでもこの
登録団体の特典です。専用施設は有料ですが、2階会議
室(椅子付)は無料で使用できます。また活動交流ス



自由に使える活動交流スペース

図書情報ステーション

ひとりの準備 みんな最後はおひとりさま

おひとりさまでもだいじょうぶ。

吉田太一 ポプラ社 2008年
「おひとりさま」この言葉からイメージ
するのは女性?しかし、実際は男性の
「おひとりさま」の孤独死が多く問題点
も多いそうです。孤独死とは、息を引き
取る瞬間にひとりだったかどうかではな
く、人生の終盤が孤独な生活だったかど
うかでは?と考えさせられる1冊です。



おひとりさまの イエローページ



おひとりさまのイエローページ

和泉昭子 メディアファクトリー2008年
「ひとり」でいることに不便や寂しさを
感じたら、それを解消する手段を探
せばいい。
テーマごとにシングルならではのお役
立ち情報を紹介します。手がかりとな
る情報が見つかりますよ。

おひとりさまの「法律」

中澤まゆみ 法研 2008年
「世の中にはいろんな決めごとがあっ
て、知らなくてソンをすることがたく
さんある。知っているのと知らないでは
大違い」
ももとの「おひとりさま」、ある日
突然の「おひとりさま」が少しでも明
く生きていけるようにと、当事者目
線で書かれた1冊です。



●徒歩/西鉄久留米駅から約10分(約700m)
●バス/西鉄久留米駅から約5分
JR久留米駅から約20分
「祝日駅前」下車、徒歩3分
●駐車場(有料)はございますが、おいでの際は
なるべく公共交通機関をご利用ください。

この公開版は複製に配慮し、再転載を禁止しています。

記念講演 ひとりの覚悟

講師：沢木 耕太郎 (ノンフィクション作家)



1947年東京生まれ。横浜国立大卒業。ルポライターとして出版『若き力者たち』『敗れる者たち』等を発表。1979年『テロルの決算』で大宅 士ノンフィクション賞。1982年『一瞬の夏』で新田次郎文学賞。1984年『パーボンスリット』で第1回読者誌エッセイ賞受賞。『運』(2005年)他多くの作品を発表。また若き日2万キロの道のりを乗合バス等でユーラシアの果てまで旅した『深夜特急』は紀行文学・青春文学の金字塔と賞われている。スポーツや旅などを題材にしたノンフィクション作品を数多く発表している。

(このレポートは10月3日に行われた講演をセンターで要約したものです。)

僕が飛行機で墜落した話

数年前、仕事でブラジルのアマソンの奥地に行った。現地近くの飛行機からセスナ機でそこに向かったのだが、そのプロペラ機は、離陸後しばらくして真付近から黒い水を流し、そのうちプロペラが止まり操縦不能となってしまった。パイロットが「もうすぐ落ちる。」と言う間にも、じりじりと密林は近くなってきて、私はシートを背もたれにしがみついているしかなかった。その時に何を考えていたかという、私の頭の中には何もなく、一緒にいったクルーの口癖の「マジかよ〜」ということばが響くばかり。そうこうしているうちにとうとう機体は密林に激突。運よく僕が飛ばされたのは焼畑農業でさら地になっていた所だった。僕は背中を強打し、痛みが1年くらい続いたものなんとか無事だった。「墜落という時、何も考えなかったのですか?」とよく聞かれた。しかし、その時は確かに「死ぬ」ということに動揺しなかった。「充分に生きて、充分に楽しんで、充分に仕事をした」という意思をずっとどこかで持っていたからだと思う。だから「ここでもう終わり。」と言われても「そうか、それでも充分満足。」といった頃からか思い始めていたと思う。そう思えたのは、それまでひとりて生き、ひとりているいるなことをやってきた結果という気がする。

「自分のことは自分でできる」という自信

何かする時に、ひとりなのか、集団なのかという選択で、いつも僕は前者をとってきた。当然リスクはあったはずだが、僕は直感的にひとりという道を選んだ。ひとは言いえると「ソロ」。対する集団は「パーティー」。これは山登りの概念で、「ソロ」のクライマーが「パーティー」を組む時、相反するのではなくかみさりあうものとなる。例えば、僕は「ソロ」で生きている、といっても家庭を持っている。僕は対外的には「ソロ」であるが、家庭に戻ってくれば「パーティー」を組んでいる。しかし、仕事や家庭を持つ時に明確な意思があったわけではない。僕は家や家庭には無自覚だったが、少しずつ年を重ねるごとに学んでいったと思う。家事はほとんどしたことはなかったが、結婚した時、妻から「あまりにもかげないそうだが、もし私と離婚したらひとりて生きていけない。だから、離婚しても大丈夫なように私が仕込んであげる。」と言われた。それから30年僕は仕込まれた。そして、妻が「いつでも離婚してあげる。」という域に達した。どれくらいすごいかという、料理が終わる時にはきれいに台所を片付けているほどなのだ。また、冷蔵庫にあるもので何か料理が作れる。不得意だったワイシャツのアイロンかけもできるようになった。僕は、わりと豊富なところがあるので、妻の言うとおり家事等を100%やっているうちに何でもできるようになった。そのことはもちろん彼女にも都合がいいだろうが、一番ありがたかったのは僕自身である。自分のことは自分でできるということは、生きていくうえでこれ以上の自信はない。少なくとも僕はそんな自信をもっている。

「ソロ」と「パーティー」

男性が家に帰ってきて「ソロ」で生きられる能力があれば鬼に金棒であるように、女性の側も外に出て「ソロ」で生きていける力を持っていれば、家の中で2人の「ソロ」の熟達した力を出しあうことができる。要するに「ソロ」で生きられる人たちが「パーティー」を組んで力を出しあうのが理想的な形ではないかと思う。例えば会社の場合、「ソロ」で生きていける人が「パーティー」を組めば、完璧とはいえないにしても、かなり高度な集団になっていくと思う。きっと家庭も「ソロ」で生きられる能力を持った男女が、できれば一緒に「パーティー」を組み、そこに子どもという存在がいて、子どももそういう2つの能力を持てるようであつたらもっといい。それはなかなかうまくいかないかもしれないけれど、理想論としてはそうである。「ソロ」で生きていける能力を身に付けていくと自信が持てるようになる。同時に生活も「ソロ」でできるということで、何かその自信が家族や他の人に対してのある柔軟さを生むような気がする。

ともあれ、どんな生き方をして、人はいづれ「ソロ」になる。だから僕たちは「ソロ」で生きていくために、その能力を培うための何十年間か生きていくのかもしれない。そうして人生の終盤、文字どおり「ソロ」になった時に、その力をゆっくり出していけばいいと思う。

働く女性のための起業支援セミナー (9月4日、11日、18日)

チャレンジしよう 自分のための仕事づくり!

これからの自分に何ができるか、雇用が厳格かと、人生の転機にあつてその選択に悩み悩んでいる女性たちに、それまでの経験や能力についての振り返りの時と新しい働き方をつくり、あわせて起業準備から起業にいたる苦労や悩み、自信をつけようという、仕事をもち直りなどを聞いて、近未来のビジネス立ち上げを応援しました。



<公開講座>

● 仕事づくりカフェ

～ 地域をめくみ、仕事づくりのキーワードに～

対談：高山 美穂 (U Planning & Design 代表)

：矢野 真由美 (高山産直実行委員会 幹事)

この時間は、私たちの生活の場を仕事の舞台にしてしまったお二人の対談。高山さん紹介のビデオ観覧で、みるさと「みのう」の風景の美しさを再認識し、地元の果物・野菜などを女性たちの目で発見していくプロセスに、新たなビジネスの可能性を体験、ワクワクした気分になりました。

また、矢野さんの被「はせ」に書ける思いとその行動力に、一同感動。気持ちがいざしたら、実際に身体を動かしていくことが仕事を作り出すのだと実感させられました。

● ～起業って、なに? なぜ、起業?～

講師：田中 由紀 (株式会社SOHO事業支援センター 代表取締役 さんへ <お加藤の声>)

自分にはできるわけがないと、今までは行動を起こす前にあきらめていたところがありました。「まず一歩踏み出すこと」「大切なのは何が出来るか」ではなく「何をしたいか」という田中さんの言葉が心に響きました。

体験発表者：井島 信枝 (ホームページ制作・SOHO) さんより <親子のメールから>

女性が専業主婦をしながら仕事をすると、いろんな悩みが生じます。私も専業主婦に寄りながら、探して進んでいきます。存在するにも、スタートが一歩づつかかると感じます。子育てをしながら進んでいくことで、皆さんの背中を押す一助になればいいですねと励まされました。

市民グループ公募企画 (9月26日)

こうやって治せる 女性の泌尿トラブル

企画：久米市産科助産師協会女性部

講師：守屋 智久子 (久米市立総合医療センター産科・助産科 主任)

今回の企画をしたのは、手話で通常のコミュニケーションをする市民グループの皆さんたち。手話による代表の挨拶が聴取者の声になってセミナーは開催されました。

守屋先生は、まず、泌尿トラブルの概要・診断は泌尿器科で行なっていることと説明し、次にビデオを使って、女性の排尿の仕組みや尿失禁の原因を分かりやすく解説されました。尿失禁は、出産や加齢等で骨盤底筋群が弱んだために起こることが多く、出産を経験した女性の約半数、成人女性の2/3が尿失禁の経験があるという数字も出ています。そう、また、くしゃみや咳をしたときに起こる慢性尿失禁の9割近くは、骨盤底筋を鍛える事で治せるとのことです。お話を聴き、ビデオを見ながら、先生の指導で受講者全員で骨盤底筋体操をやってみました。はじめは緊張が分らず戸惑いましたが、体験後、再度解説。疑問も試している内にコツがつかめてきたという声があがりました。



慢性尿失禁の経験者の泌尿トラブルも原因では、軽中度の骨盤底筋を鍛える事で、1人で簡単に治療費を減らして下さいね。

守屋先生



企画者から

以前、産科助産センターの産科で守屋先生から聞いた「泌尿トラブルに悩まれている」という話をもちっと多くの女性たちに向けてほしいという思いがきっかけで企画しました。高知市からあつちまでいた尿失禁が簡単な体操をすることで治せるものだと分かり、参加者にはもっともとの喜びの表情がみられました。

グループの枠を超えて多くの方に届けたいことは、私たちがもっとも、もっと嬉しいことです。こういった活動企画を利用して、また産科助産センターと関係が深まるといいと思います。

「HIVを知ろう」/Support of the Child

HIVが感染していくことを体感できる“水”を使ってのワークや講演。グループワークではHIVに感染せずに互いを尊重できる関係について考えました。



「昨日・今日・明日 女と男～生きることに働くこととを
考える～」/久留米男女共同参画推進ネットワーク
寸劇をおして生きること、働くことの難しさと同
題点を考えました。会場は、笑いと共感の声であふれ、
後半のフリートークでは3人の方から各々の働き方、
生き方の提議がありました。

「一人芝居と語りでつづる女性の権利の歴史」
城島女性ネットワーク

女性の権利が軽視されていた時代に、力強く生きてきた女性たちの話
が一人芝居と“語り”で演じられ、男女共同参画社会づくりの重要
性に気づくことができました。



「男も
女も
に生きる私たちの生き方」/田丸町女性ネットワーク
男女がいかにお互いを「頼」として認め合いながら、生きて
いくことができるか。介護を取り巻く現状や社会の実態につい
て事例を挙げながらの講演でした。



「いつまでも若く！美しく！パートII」
北野女性ネットワーク

久留米絆をパリ・コレクションで紹介したファッションデザ
イナーの尾藤照子さんの講演と、地域の女性たちがモデルにな
ったファッション・ショーで会場は盛り上がりました。モデル
には男性も起用されました。



「みんな(男女)が安心して働き、生きられる社会をめざして！」
三浦女性ネットワーク
前半は、えがりて久留米芸術劇団による創作劇の上演。生きる
ことと働くことの問題点を提起する迫真の演技に、会場には共
感の声と爆笑が響き渡りました。

映画 マルタのやさしい刺繍

—夢みるパワーとは、あきらめないココロ—



提供=アルシネアラン

スイスの谷間にある保守的な村で“ランジェリーショップをオープンさせる”という夢
をもつ80歳のマルタ。夫との死別の悲しみを乗り越えて夢をあきらめないマルタと村の女
性たちを描いた「マルタのやさしい刺繍」が上映されました。参加者からは「生きる元
気ももらいました」「新しいことにチャレンジしたくなりました」「いつになっても夢を
持つことの素晴らしさを感じました」などの声が寄せられ、人生の希望や目標を持ち続け
ていくパワーをもらったようです。

2006年 スイス 監督：ベティナ・オベルリ
キャスト：シュテファニー・グラウザー ハイディ・マリア・グレスナー

特集 くるめフォーラム2009



わたし
響きあう 男女たちの生き方

・市内の43の団体・グループを中心に、総勢60人
からなる実行委員会が結成され、約6ヶ月かけての
めフォーラム2009の準備が進められました。
期間中は、記念講演・セレモニー、映画上映や展示・
パズルのほか、男女共同参画社会実現をめざす活動を
している17の団体・グループにより、えるピア
久留米や地域会場で市民企画が実施されました。演劇、
ワークショップ、替え歌の合唱など工夫を凝らした多
彩な企画をご紹介します。

「里親が訪く日々の生活～個として尊重され、地域で育つ子
どもたち～」/親と子のこころの対話研究会

里親実務専門員から、子どもの虐待やその影響についての
説明や、17年間に5人の子の里親となった体験報告などもあ
り、子どもの安心感を保証する継続的な活動が提案されました。



「男女平等教育は今」/久留米市男女共同参画教育を推進する会
久留米市内の全小学校5年生と中学2年生を対象に行った「男女平
等教育に関する意識調査」の報告を受けてのパネルディスカッション。
パネリストの思いやそれぞれの男女平等観などについて語り合いました。



「おはなしと音楽にのせて～響き合う瞬間を求めて～」
ローズマリー

男女平等をテーマにした絵本「おはなしの朗読・読み聞かせなどをベ
ースに、ピアノとチェロの生演奏で感動的なひとときとなりました。



「歌いどばソラジェンダー 歌いあげよう私らしい人生」
S-ba～ぶるりばん
男女平等や女性の自立、女性に対する暴力防止をテ
ーマに、おなじみの曲にオリジナルの歌詞をつけた替
え歌に、来場者も加わって大合唱となりました。



「格差社会ニッポン～女と男の貧困脱出法～」
北京JAC九州 in 久留米・女問研

ジャーナリストとして第一線で活躍する朝日新聞社
編集委員の竹信三恵子さんの鋭く軽妙な講演に参加者
は大納得。「劣悪な方向に進んでいる女子労働の現状」
とその解決法についてのお話でした。



「考えていますか？ 夫婦のこと、老後のこと」
NPO法人新現役の会ちくごセンター

定年を迎えた夫婦を軸に、その親の世代の介護などをテ
ーマにした寸劇をみて、夫婦の相互理解の大切さを考え、
パネラーの意見交換をおして日常の課題を探りました。



「はたして専業主婦は生きのびられるのか」
NPO法人ル・バニー

参加者全員で「私たちの今」を考え、詩にして朗読。その後のワ
ークでは参加者相互の意見交換をして、社会の移り変わりとともに
「制度」としての専業主婦はどうなっていくのかを検討しました。



「介護の社会化は・・・今？～女性の介護・男性の介護～」
高齢社会をよくなる会・久留米

介護を取り巻く現状や社会の実態について事例を挙げながら
の講演。高齢者の介護で一番大切なのは、心のケアであるとの
訴えが心に残りました。



